



たった一つの言葉

学校長 小邑 政明

前号は、大切にしておきたい3つの「S」について書きました。

本号は、生徒の皆さんが一層明るく元気に学校生活を送ることができるよう、私が最近読んだ本『たった一つの言葉』（明橋大二著）をきっかけとして考えていることを書きます。

昨今、体罰や「いじめ」が話題になることが多くなり、しつけや道徳教育の重要性が一層高まっています。その中で私が最も大切にしたいキーワードは「言葉」です。人を明るく元気にするのは「ほめ言葉」です。先に紹介した本の中に、「どんな人でも必ずほめることができる」5つのポイントが書かれています。

「・できないことでなく、できているところに注目する

- ・できて当たり前でなく、できなくて当たり前
- ・結果だけでなく、過程をほめる
- ・比較するなら、以前の自分と
- ・「ありがとう」は最高のほめ言葉

これには練習が必要ですが、練習すれば必ずできるようになります。また、これを続ければ相手のみならず自分にとっても『自己肯定感』が高まり、前向きで充実した生活が送れる。」と結んでいます。

逆に「配慮の足りない言葉」は凶器になります。悩みやストレスが多くない人にはたいした影響を与えない「言葉」でも、悩みやストレスによって一杯いっぱいになっている人に対しては最後の一撃

となることもあります。

少し前のことですが、女子柔道の体罰問題が話題になったことがありました。新聞に掲載された被害者のコメントの中に「体罰より人格すら否定する言葉の暴力に耐えられなかった」とあったことが忘れられません。

このときに「言葉の重み」について考えたことがきっかけで、私が小学校の教科書で学んだ「路傍の石」（山本有三著）の一場面を思い出しました。学力優秀であるが家庭の事情で中学校進学を断念した少年吾一が、汽車が近づいてくる鉄橋にぶらさがるといふ事件を起こします。そのとき担任の先生が吾一にかけた言葉が強く印象に残っています。「吾一というのはね、われはひとりなりという意味だ、・・・、おまえは中学校へ行って、立派な人になりたいと思っているのだろう。・・・、一生つてものも、一度しかないのだぜ。」この先生は後に吾一に大きな迷惑をかけ、今度は吾一の言葉が先生を救うこととなります。

今春、大学入試の後期試験に合格した生徒が、「本校の先生が『前期試験の合格は期待していない。君の力が発揮できるのは後期試験だ。君を教えた者だから分かる。』と言ってくれたことが背中を押してくれて合格に繋がった。」と嬉しい話をしてくれました。

「The great teacher inspires.」（本当に優れた教師は、生徒の心に火を点ける。）を本校教職員の「たった一つの言葉」にできたらと思っています。